

Part 4

Special Feature / Beyond ON-OFF

余暇を、漫然と過ごすのではなく、「学び」を得る時間に充てたい、さらには、学びを「奉仕」につなげたい、と考える人たちがいる。

1950年代に生まれ、広く学びを提供する場所として定着したカルチャー・センターと、近頃話題の芸術祭ボランティアに取材し、学びの現場を探った。

学びの時間を楽しむ

学びたい、に込める現代の寺子屋

カルチャー・センター

取材執筆／真田邦子 撮影／川田雅宏

年齢、性別、学歴、職業に関係なく、広く万人に開かれた学びの場、それが「カルチャー・センター」である。その数は、全国1024カ所、講座数は18万7824、受講生は123万5021人に上る（*）。

ヨーロッパの家庭料理、ミステリーの書き方、エッグアート、テンペラ画、はじめての映画づくり、スポーツ吹矢、胡弓に親しむ、伝わるプレゼン資料作

成術（新・仕事の学校）……。これらはすべて東京都心にある大手カルチャー・センター「池袋コミュニティ・カレッジ」で開かれているもので、約1400に上る講座のほんの一部だ。月あたり1万人を超える受講者の男女比を見ると、圧倒的に女性、特に主婦層が多く、男性は15%ほど。年齢別では中高年の割合が最も多く、50歳以上が約6割を占める。

学ぶことで叶う夢

池袋コミュニティ・カレッジでは、1979年の設立以来、それぞれの時代のブームを捉え、市場のニーズに沿った講座を提供してきた。その一方で、知る人ぞ知る、ここでしか体験できない貴重な講座も用意している。そのひとつが、カレッジ内に工房を構える「ル

リユール」講座。ルリユールとは、本をばらして製本し直し、革や紙で新たな装丁を施すヨーロッパ伝統の手作り製本技術だ。なかでも本格的な「パッセ・カルトン」クラスでは、週1回のレッスンで3冊を並行して進めるが、乾かしたり圧をかけたという工程が60以上もあり、仕上げるのに2〜3年の歳月を要するという。この講座に集

まる人たちの共通点は、とにかく「本を愛している」こと。時間と手間とお金をかけ、愛読書を世界に1冊しかない特別な本に仕上げる。これぞ読書家が願う、究極の贅沢なのかもしれない。もうひとつ長く受講生に支持されているのが、日本でも有数のバレエ団、松山バレエが指導する講座だ。大人がバレエを習うことがまだ一般的でなか

った27年前に開設され、指導歴23年目の小川麻乃先生によれば、生徒数175人のうち、始めて10年以上の人が半数、20年を超える人が約4分の1もいるという。受講生には仕事を持つ人が多いが、貴重な日曜日の時間を惜しみなく練習に注ぎ込んでいる。何が彼女たちをそこまで惹きつけるのか。「バレエは小さい頃からの夢でした。



【ルリユール講座】

ケースの材料をバンドで仮組み立てし、本に合う大きさを検討する岡本幸治講師と受講生（上）。大型プレス機やかがり台など特殊な道具や材料が整った工房で、ひとりひとりの作業状況に沿った個人指導が受けられる。



卵の殻に装飾するエッグアートや、テンペラ画といった本格的なアートも学べる（右／佐藤文講師の作品。左／美術家・石原靖夫講師によるマルティニ「受胎告知」部分・復元模写）。



【バレエ講座】
右／日曜午後の「松山バレエ」初級クラス。左／毎年、カレッジの全ダンス講座が参加する受講生公演が開かれる。総勢100名からなる松山バレエの「くるみ割り人形」がトリを務めた。



お気に入りの本に特別な装丁を施し、世界に一冊だけの書物をつくりあげる。



上／タイトル文字だけでなく天にも金が施してある。幻想的な物語にふさわしい、豪華な装丁。右／2色使いのシックな革の間から覗く、カラフルな見返し美しい。ともに受講生の作品だ。

いったんは子どもに託してみたものの、やっぱり自分でやってみたくて」と話すのは、5年目の村上孝子さん。毎年2月の発表会では、始めて5カ月の新人からベテランまでが一致団結して舞台をつくりあげる。諦めていた夢が叶う、初心者でも上級者と共に舞台上で、その喜びが厳しく激しい練習のモチベーションになっていく。「人間の体は、いくつになっても応えてくれます。自分の常識を超えて夢は実現できるということに、バレエを通して気づいていただきたいですね」(小川先生)

熱血授業で韓国語に目覚める

余暇を使った学びで一般的によく知られるのが、英会話をはじめとする語学。近年では、韓国文化のブームに後押しされた韓国語人気が続いているが、琉球舞踊家の志田真木さんも、たくさん映画や音楽に触れたことが学びのきっかけとなった。

まずは韓国語の音の響きに、続いて礼節を重んじる韓国の身体表現の美しさに惹かれ、言葉を学ぼうと思ったという。最初は独学で始めてみたものの、やはり正しい発音を学びたいと一念発起。公演や指導など忙しい仕事の合間の時間を捻出し、約1年前に、ソ・ボミ先生が教えるクラスの扉を叩いた。「クラスの人は、一緒に復習をし次の授業に備えるなど助け合っています。



英、仏、伊、中などの語学講座が揃うなか、韓国語の人気の高まっている。



【外国語講座】

琉球舞踊家の志田真木さん。講師の熱心な指導により、1年ほどで韓国語がかなり上達したという。右は、テジョンの大学で学生や先生らとともに行った、琉球舞踊のワークショップの様子。

先生は、仕事で休みがちな私のことも気にかけてくださり、時には電話で発音チェックをしてくださるほど指導熱心です。私も普段は教える身ですから、語学だけでなく、教師としての姿勢まで学ばせていただいている気がします」世界各地で公演をする機会も多い志田さんだが、韓国語を習い始めて10カ月後、公演やワークショップのために韓国に1カ月滞在した。韓国語しか通

じない環境に身を置いたが、想像以上に聞き取りが得意思疎通がはかれたことに驚いた。「言葉を習うことでその土地や人への興味が深まり、それが本業の広がりにも大きくつながったと実感しています」(志田さん)

学びへの需要と供給

時間をかけ凝った製本技術を習得する講座、何年も練習に通いつつ年に一度本格的な舞台をつくるバレエ、熱心な指導で驚くべき上達を遂げた外国語。これらがみなカルチャー・センターの講座で行われた事実であることに、改めて驚かされる。商業施設として、人びとの学びの情熱を丁寧にくい取り、その多彩さや内容の密度を進化させてきたからであろう。

「カルチャー・センターは、ただ学ぶだけでなく、日常の職場や家庭の人間関係とは別の新しい仲間をつくる場、また新たな自分の可能性を発見する気づきの場でもあります。ここでの講座が、生活のなかでもとても重要なポジションを占めている方も多くいらつしやいます」と語るのは、池袋コミュニティ・カレッジの井上竜文さん。

自発的な学びの意欲に応えた教室で、仲間と共に楽しく習う。カルチャー・センターは、日本の余暇を彩る、現代の「寺子屋」的存在といえるのかもしれない。

アートと地元貢献する、新しい学びのかたち

芸術祭ボランティア

取材執筆 編集部

近年、日本各地で開催されるようになった芸術祭。なかでも広く人気を集めているのが「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」(新潟)と「瀬戸内国際芸術祭」(香川・岡山)だ。2010年に第1回が開催された瀬戸内国際芸術祭には、国内外93万8000人以上の人が訪れた。

働き盛りの女性が活躍

これらの芸術祭で重要なのが、運営をサポートするボランティアの存在である。瀬戸内国際芸術祭でも「こえび隊」と呼ばれるボランティアが活動している。

「芸術祭のボランティアというと学生が多いように思われがちですが、こえび隊の中心となっているのは、30代の女性、つまり働き盛りの世代なんです。そう語るのが、こえび隊事務局長の甘利彩子さん。現在、こえび隊に登録しているボランティアの人数は約4000人。うち7割が女性、平均年齢は32歳だ。会期中は作品鑑賞の受付がボランティア活動の中心だが、芸術祭開催前には、作品制作のサポートをするボランティアに積極的に参加する人も多い。「こえび隊の皆さんのモチベーション

は、自主的に何かやりたいということから来ています。ですから、事務局から与えられたことをやるというだけでは、皆さんのやる気を十分に生かせません。自分で考えてやる、自分から提案するという発想をしています」(甘利さん)

シニア世代では、作品ガイドなどのチームリーダーを任せられる人も多いという。



Amari Ayako

地元住民との協働

今、日本中の離島で過疎高齢化が進んでいるが、瀬戸内の島も例外ではない。「こえび隊の活動は、作品制作の手伝いや受付だけではなく、地元のお祭りに参加し、島の方々とともに活動するのも、こえび隊の重要な役割です」(甘利さん)。聞けば、前回の芸術祭から今回の芸術祭までの間、島の住民と芸術祭との信頼関係を築くの

に重要な役割を果たしたのが、こえび隊だという。

その結果、地元の人がともさらに積極的に芸術祭の運営に携わるようになってきている。「空いた時間を使って芸術祭の制作に参加することで、地元の人も元気になった。開催直前は制作が深夜にまでなって大変でしたが(笑)。「小豆島町コミュニティアートプロジェクト」で作品解説をしていた地元の男性は、このように語った。

自分から学びたい、自分から何かを得たい、こえび隊にはそのようなモチベーションで動いている人が多い。制作に積極的に関わって、作家との共同作業で作品を作りあげることが、なかなか他ではできない経験だろう。自分が楽しみながら学び、そして地元のためにも、もちろん芸術祭のためにもなる。現在の新しい形の「学び」を見た思いがした。

「こえび隊の面々と地元の人々が見るの、いくつも見ると、とてもうれしいです」



女木(めぎ)島(香川県高松市)の大祭。こえび隊が加わることで、地元の祭りが活性化された。

芸術家との作品制作

台湾のアーティスト、ワン・ウェンチーの竹を使った作品「小豆島の光」の制作でも、こえび隊が重要な役割を果たした。



Step 1 竹を切るこえび隊のメンバー。



Step 2 作品が徐々に姿を現してきた。



Step 3 急ピッチで作品を仕上げる。



Step 4 芸術家とこえび隊の協働の結晶。